

運動部活動における生徒の認知する指導者像と生徒の依存性

－性別・学年・競技水準・競技種目からの検討－

Student Perception of and Dependency on Teachers in School Athletic Clubs

: Analysis in terms of gender, grade, competition level and event

松井 幸太, 山下 一夫

Kota MATSUI and Kazuo YAMASHITA

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第28号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.28, Feb., 2014

運動部活動における生徒の認知する指導者像と生徒の依存性

－性別・学年・競技水準・競技種目からの検討－

Student Perception of and Dependency on Teachers in School Athletic Clubs

: Analysis in terms of gender, grade, competition level and event

松井 幸太*, 山下 一夫**

*〒673-1494 兵庫県加東市下久米 942 番地 1 兵庫教育大学大学院 連合学校教育学研究科

**〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島 748 番地 鳴門教育大学

Kota MATSUI * and Kazuo YAMASHITA **

* Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education

942-1 Shimokume, Kato-shi, Hyogo, 673-1419, Japan

** Naruto University of Education

748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：本研究では、高校運動部活動における指導者に対する生徒の依存性について、生徒の認知する指導者像ごとに生徒の性別・学年・競技水準・競技種目による諸要因から比較した。運動部所属の男女978名に対して質問紙調査を行い、指導者に対する生徒の依存性と指導者の関わりについて回答を求めた。指導者の関わりを受容的な関わりと統制的な関わりとの2側面から捉え、4つの指導者像（受容型、統制型、両高型、両低型）に分類した。そして、生徒の統合された依存性と依存欲求について、指導者像要因と生徒の諸要因による2要因分散分析を行った。結果より、統制型と両低型では女子のほうが男子より統合された依存性が高いこと、統制型では3年生が他学年より依存欲求が高く、統合された依存性は低いこと、競技水準が高い生徒のほうが統合された依存性が高く、依存欲求は低いこと、個人種目のほうが集団種目より統合された依存性が高く、依存欲求は低いことが示された。

キーワード：高校運動部活動、生徒の認知する指導者像、統合された依存性、依存欲求

Abstract : This study aims to examine students' dependency on his or her teacher through two factors: students' perceptions of the teacher and students' profiles (sex, grade, competition level and event) in high school athletic clubs. For this purpose, we administered questionnaires on 978 high school students belonging to school athletic clubs. The questionnaire probed the student's perceptions of and dependency on his or her teacher. Responses were analyzed using exploratory factor analyses. The questionnaire on perceptions of the teacher had two subscales (acceptance and control); consequently, based on their responses, participants were divided into four groups (acceptance, control, acceptance-control, and nonacceptance-noncontrol). The questionnaire on dependency on the teacher had two subscales (integrated dependency and dependence need). We performed respective ANOVA in order to compare students' dependency through students' perceptions of teacher and students' profile. In regards to integrated dependency, all factors of student's profile indicated significance. In regards to dependence need, grade, competition level within clubs and event indicated significance.

Keywords : high school athletic clubs, student perception of teacher, integrated dependency, dependence need

I. はじめに

本研究は、高校運動部活動における指導者の関わりと生徒の依存性について検討するものである。運動部活動は学校教育における課外活動の一つであり、文部省(1997a)によれば、「学校教育活動の一環として行われており、スポーツに興味と関心を持つ同好の生徒に

よって自主的に組織され、より高い水準の技能や記録に挑戦する中で、スポーツの楽しさや喜びを味わい、豊かな学校生活を経験する活動である」と述べられている。つまり、運動部活動は生徒自身の興味と関心から自主的に取り組まれる活動である。生徒が他者から課されるのではなく、自身の興味と関心から自主的に活動する時、積極な参加や取組が期待できる。実際に、中学校では生

徒の73.9%が、高校では生徒の49.0%が運動部に加入しており（文部省、1997b）、運動部活動の教育的な意義として「学級や学年を離れて生徒が自発的・自主的に活動を組織し展開することにより、生徒の自主性、協調性、責任感、連帯感などを育成する」（文部省、1997a）と述べられている。このように考えると、運動部活動は自由参加の課外活動ではあるが、多くの教育的役割が求められているといえる。

そして、生徒の教育的課題の一つとして自立性の獲得が挙げられる。生徒は大人へ依存しながら物事の見方や社会的な規範を身につけていく児童期から、今度は自らの判断により行動する成人期を迎えつつある。そのため、青年期を過ごす生徒たちにとって、自立的な態度を身につけていくことが重要な課題となっているといえる（Havighurst, 1953）。

しかし、近年の運動部活動現場では、スポーツ競技としての専門化が進み、生徒だけでなく指導者や親といった周囲の大人にとっても競技成績への関心が高まっている（永島、1987）。勝利至上主義に基づく競技志向の部活動指導では、じっくりと育てることよりも、早急に教え込む指導が優先されがちである。管理的な指導、もしくは統制的な指導の中で、子ども達が技術や戦術を教えられすぎたり、一方的に練習メニューを与えられたりして活動していることによって、子ども達がスポーツを楽しみながら、自分で考える、自分で工夫する、自分で判断するといった自発性や独創性が生まれにくいことが指摘されている（武藤、1985；永島、2002）。

このような問題に関して、松井（2012）は、運動部所属の男子高校生に対する質問紙調査により、指導者の関わりと指導者に対する生徒の依存性との関連を調べている。指導者の関わりについては受容的な関わりと統制的な関わりとの2側面から捉え、生徒の認識する指導者像を

受容型、統制型、両高型、両低型に分類した^{注1)}。そして、指導者に対する生徒の依存性を、自立した依存の形態である統合された依存性^{注2)}と未熟な依存の態度を示す依存欲求の2側面から捉え、生徒の認知する指導者像ごとに依存性の在り方を比較しており、次のような結果を示している。受容型では指導者に対して依存的になりすぎることなく、自己の判断基準をもちつつも、必要に応じて指導者を頼ることができる自立的な依存の在り方であった。統制型では、いわゆる“依存的”で未熟な依存性の特徴が示された。両高型では、指導者に対する未熟な依存性も有するが、自立的な依存性も身につけつつある依存の在り方であった。両低型では、依存性に乏しく、希薄な関係が示された。以上より、生徒の認知する指導者像ごとの生徒の依存性の在り方についてそれぞれの特徴が示されている。

ところで、先行研究における生徒の認知する指導者像は、指導者の指導行動に対する生徒の認知に基づき指導者像を同定しているが、生徒の認知の仕方には個人差があると考えられる。Smoll & Smith（1989）は、スポーツ場面での指導者行動に対する生徒の認知と生徒の反応行動に関して、一連の理論モデルを提唱している（図1）。このモデルによれば、指導者の言動に対して、競技者がそれをどのように認知するかによって、競技者の反応が決定されるが、その過程に競技者の個人要因や状況要因が関連していることが示されている。そのため、松井（2013）が、生徒の認知する指導者像について生徒の性別、学年、競技水準、競技種目の各要因から比較を行い、それぞれの要因による偏りが示されている。

しかし、生徒の依存性に関しては、これらの要因による比較が行われていない。そこで本研究では、生徒の依存性に関して性別・学年・競技水準・種目の各要因から比較することを目的とする。

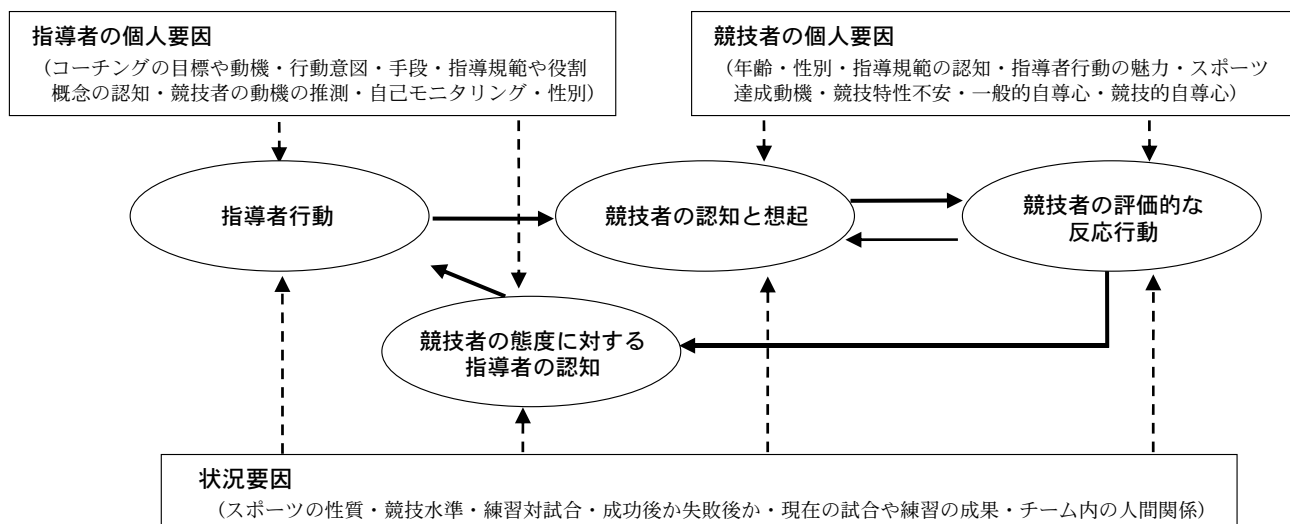


図1 Smoll & Smith（1989）の理論モデル

II. 方 法

1. 時期と対象者

2008年6月下旬～9月上旬に1都5県の高等学校運動部所属の生徒978名を対象に質問紙調査を実施した。競技種目は球技を中心とした20種目である^{注3)}。本研究では、指導者との関係について検討していくため、少なくとも週3日は指導者が部活動指導にあたる部活動を対象とした。また「指導者」の多くは学校の「教員」であるため、部活動場面だけでなく日常の学校生活場面での関わりをもつ場合がある。そのため、日常の学校生活場面よりも、部活動場面で主に指導者と関わる生徒を対象とした^{注4)}。

2. 手続き

運動部ごとに集団調査法で実施した。調査の際、筆者が生徒に対して匿名性や守秘義務の遵守について説明を行い、承諾した生徒のみが調査に参加した。質問紙のほとんどがその場で筆者により回収され、後日回収の場合には、質問紙は封入された状態で回収された。

3. 質問項目

1) フェイスシート

- ①性別：男子・女子の2択で回答を求めた。
- ②学年：学年について回答を求め、得られた回答から1年、2年、3年以上の3つに分類した。
- ③部内における生徒の競技水準：部内における生徒個人の競技水準について、レギュラー、準レギュラー、非レギュラーの3択で回答を求めた。
- ④部活動間の競技水準：部活動としての競技水準について、全国大会水準、都県大会水準、地区大会水準の3択で回答を求めた。
- ⑤競技種目：種目について回答を求め、得られた回答から集団競技と個人競技に分類した^{注5)}。

2) 生徒の指導者に対する依存性

指導者に対する生徒の依存性に関しては、運動部活動における統合された依存性と依存欲求の2側面の依存性を尋ねる10項目(松井, 2012)を利用した。生徒の指導者に対する依存性に関しては、質的な違いによって2つの概念が考えられる。一つは、状況に応じて人にうまく頼ることのできる自立的な意味での「統合された依存性」である。関(1982)を始め、近年、依存性の有する積極的な意味が見直されつつあり、自立にとって不可欠なものとして考えられている(Bowlby, 1973; 井上, 1995; 山下, 1996; 竹澤・小玉, 2004)。そして、もう一つは、指導者に対していわゆる“依存的”な状態を示し、指導者に対して肯定的な配慮や反応を求める「依

存欲求」である。指導者へ依存することによって安定するが、自己の判断基準が不明瞭であるため、指導者の言動に自身の行動が大きく左右される未熟な依存の形態と考えられる。本調査では、指導者に対する統合された依存性と依存欲求の2種類の依存性に対して、5件法(とてもあてはまる, ややあてはまる, どちらでもない, あまりあてはまらない, 全くあてはまらない)で生徒に回答を求めた。

3) 生徒に対する指導者の関わり

運動部活動場面において普段指導者がどのように生徒に関わっているかについて、生徒に対する指導者の関わりを尋ねる項目(松井, 2012)を利用した。松井(2012)は、親の養育態度に関するBaumrind(1967)の「受容・寛容」と「厳格・監督」をもとに項目を作成し、指導者の受容的な関わりと統制的な関わりとの2側面から生徒の認知する指導者像について検討を行っている。本調査においても、指導者の受容的な関わりと統制的な関わりとの2種類の関わりに対して、5件法(とてもあてはまる, ややあてはまる, どちらでもない, あまりあてはまらない, 全くあてはまらない)で生徒に回答を求めた。

III. 結 果

1. 指導者に対する生徒の依存性の比較

1) 対象者全体における特徴

指導者に対する生徒の依存性を尋ねる項目の平均値と標準偏差を表1に示した。平均値の高かった項目は、順に項目2「最後は自分で決めるにせよ、困ったときには指導者の意見も求める」($M = 3.62$)、項目3「何かに迷っている時には、指導者に『これでいいですか』と聞きたい」($M = 3.56$)、項目5「部活動のことで何か決めるときには、指導者の意見が聞きたい」($M = 3.46$)であった。高橋(1968)は依存行動の様式について5つに定めているが^{注6)}、その様式の観点で考えると、平均値の高かった項目はいずれも指導者に対して意見や助言を求めようとする項目内容であった。

反対に最も平均値の低かった項目は、項目9「指導者が喜ぶように私は行動しているところもある」($M = 2.97$)、項目6「自分と指導者の立場を尊重しつつ、必要なときには、うまく頼ったり頼られたりするほうだ」($M = 2.98$)であった。項目9は、生徒自身の判断や欲求よりも指導者の判断や願望が優先されていることを表す項目である。また項目6は、成熟した形での依存性としての相互依存的な関係を表しており、高校生と指導者との依存関係としては高得点を期待しにくい項目内容であったと考えられる。

全体としては、項目6, 9を除く全ての項目において、

表1 指導者に対する生徒の依存性を尋ねる項目の平均値と標準偏差 (1 ≤ M ≤ 5)

No.	項目内容	性別		学年			競技水準(部内)			競技水準(部活動間)			競技種目		全体 n=978
		男子 n=813	女子 n=164	1年生 n=428	2年生 n=399	3年生 n=150	レギュラー n=333	準 n=212	非 n=368	地区大会 n=312	都県大会 n=510	全国大会 n=100	集団競技 n=642	個人競技 n=336	
2	最後は自分で決めるにせよ、困ったときには指導者の意見も求める	3.55 b (1.09)	3.94 a (0.76)	3.67 (0.99)	3.56 (1.08)	3.63 (1.16)	3.77 a (1.07)	3.68 a (1.04)	3.41 b (1.00)	3.67 (1.08)	3.54 b (1.04)	3.89 a (1.04)	3.52 b (1.07)	3.81 a (1.00)	3.62 (1.05)
3	何かに迷っている時には、指導者に「これでいいですか」と聞きたい	3.50 b (1.14)	3.85 a (0.84)	3.67 a (1.06)	3.46 b (1.12)	3.53 (1.16)	3.61 (1.12)	3.58 (1.05)	3.45 (1.12)	3.60 (1.11)	3.49 (1.12)	3.74 (1.00)	3.52 (1.13)	3.64 (1.05)	3.56 (1.11)
4	1人ではどうにもならない時は、指導者に相談することもある	3.05 b (1.28)	3.49 a (1.03)	3.22 a (1.17)	3.01 b (1.29)	3.20 (1.33)	3.40 a (1.27)	3.14 b (1.20)	2.83 c (1.21)	3.22 b (1.28)	2.99 c (1.23)	3.61 a (1.07)	2.97 b (1.25)	3.43 a (1.19)	3.13 (1.25)
5	部活動のことで何か決まるときには、指導者の意見が聞きたい	3.40 b (1.00)	3.72 a (0.88)	3.50 (0.92)	3.44 (1.01)	3.37 (1.09)	3.52 a (1.01)	3.59 a (0.90)	3.28 b (0.98)	3.49 b (1.00)	3.37 b (1.00)	3.78 a (0.86)	3.39 b (1.01)	3.59 a (0.93)	3.46 (0.99)
6	自分と指導者の立場を尊重しつつ、必要なときには、うまく頼ったり頼られたりするほうだ	2.94 b (0.97)	3.20 a (0.73)	3.03 (0.83)	2.96 (0.98)	2.91 (1.13)	3.21 a (0.99)	3.02 b (0.85)	2.72 c (0.89)	2.99 b (0.89)	2.89 b (0.97)	3.39 a (0.82)	2.86 b (0.95)	3.22 a (0.87)	2.98 (0.94)
7	指導者は自分を見守ってくれているように思うので、大事な場面も切り抜ける	3.12 b (1.08)	3.53 a (0.85)	3.24 (0.99)	3.19 (1.10)	3.05 (1.14)	3.39 a (1.08)	3.32 a (1.04)	2.90 b (0.99)	3.22 b (1.06)	3.08 b (1.07)	3.64 a (0.89)	3.07 b (1.08)	3.42 a (0.98)	3.19 (1.06)
10	直接手助けしてもらわなくても、指導者に話しをすることで、自分の判断がしやすくなる	3.20 b (1.04)	3.51 a (0.75)	3.29 (0.94)	3.18 (1.03)	3.31 (1.10)	3.43 a (1.00)	3.30 a (0.93)	3.03 b (1.00)	3.27 b (1.03)	3.16 b (1.00)	3.65 a (0.88)	3.17 b (1.05)	3.41 a (0.89)	3.25 (1.00)
統合された依存性得点(項目2, 3, 4, 5, 6, 7, 10)		3.25 b (0.81)	3.61 a (0.54)	3.37 (0.70)	3.26 (0.83)	3.29 (0.88)	3.47 a (0.80)	3.38 a (0.75)	3.09 b (0.74)	3.35 b (0.81)	3.22 b (0.79)	3.67 a (0.65)	3.21 b (0.80)	3.50 a (0.71)	3.31 (0.79)
1	何かするときには、指導者に気を配って励ましてもらいたい	3.18 (1.06)	3.18 (0.96)	3.21 (1.03)	3.12 (1.02)	3.29 (1.14)	3.18 (1.08)	3.18 (1.06)	3.16 (1.02)	3.29 a (1.07)	3.17 a (1.02)	2.93 b (1.08)	3.21 (1.05)	3.12 (1.03)	3.18 (1.05)
8	プレーしている時に、指導者の顔が気になることがある	3.39 (1.21)	3.34 (1.08)	3.42 (1.13)	3.33 (1.21)	3.45 (1.26)	3.19 b (1.30)	3.58 a (1.13)	3.51 a (1.05)	3.44 (1.18)	3.43 (1.18)	3.13 (1.18)	3.52 a (1.14)	3.13 b (1.23)	3.39 (1.19)
9	指導者が喜ぶように私は行動しているところもある	2.97 (0.96)	2.98 (0.81)	2.93 (0.87)	2.96 (0.94)	3.13 (1.05)	3.04 (1.00)	3.05 (0.89)	2.90 (0.86)	2.90 b (0.98)	2.98 b (0.89)	3.19 a (1.01)	2.98 (0.95)	2.95 (0.91)	2.97 (0.93)
依存欲求得点(項目1, 8, 9)		3.18 (0.78)	3.16 (0.68)	3.19 (0.72)	3.14 (0.78)	3.29 (0.81)	3.13 (0.84)	3.27 (0.74)	3.19 (0.68)	3.21 (0.77)	3.19 (0.75)	3.08 (0.80)	3.24 a (0.75)	3.07 b (0.78)	3.18 (0.76)

注) 有意差が確認された箇所については、大小関係をアルファベットで示した (a > b > c)。なお、0.1%水準および1%水準で有意であったものを太字で、5%水準で有意であったものを細字で記した。

中央値を上回っており、全体的に生徒の依存性が高い傾向がうかがえる。

なお、指導者に対する生徒の依存性を尋ねる項目に関しては、松井(2012)により2因子構造が確認されている。第1因子は、1人で抱え込みすぎることなく、状況に応じて適切に指導者の援助を求めたり、自分で判断するための助言を得ようとしていたりしている態度を表し、項目2, 3, 4, 5, 6, 7, 10の7項目から構成されている。第2因子は、生徒が自分自身の判断基準を持てずに、指導者の存在を拠り所とし、指導者に対して肯定的な配慮や反応を求めようとする欲求を表し、項目1, 8, 9の3項目から構成されている。本研究においても、松井(2012)の因子構造に基づき、第1因子を構成する項目群の平均値を統合された依存性得点とし、第2因子を構成する項目群の平均値を依存欲求得点として算出した(表1)。

2) 性別による比較

指導者に対する生徒の依存性を尋ねる各項目と、統合された依存性得点および依存欲求得点の平均値に関して、生徒の性別による偏りの有意性をt検定により調べた。結果は、表1の通り、項目2 ($t(975)=4.31, p<.001$)、項目3 ($t(975)=3.70, p<.001$)、項目4 ($t(975)=4.16, p<.001$)、項目5 ($t(975)=3.77, p<.001$)、項目6 ($t(975)=3.28, p<.001$)、項目7 ($t(975)=4.54, p<.001$)、項目10 ($t(975)=3.68, p<.001$)と統合された依存性得点 ($t(975)=5.33, p<.001$)において有意であった。有意で

あった全ての項目において、女子のほうが男子よりも得点が有意に高かった。

3) 学年による比較

指導者に対する生徒の依存性を尋ねる各項目と、統合された依存性得点および依存欲求得点の平均値に関して、生徒の学年による偏りの有意性を一元配置の分散分析により調べた。結果は、表1の通り、項目3 ($F(2, 974)=4.16, p<.05$)、項目4 ($F(2, 974)=4.16, p<.05$)が有意であった。

そこで、多重比較(LSD法)を行ったところ、どちらの項目においても1年生が2年生よりも得点が有意に高いことが示された。

4) 部内における生徒の競技水準による比較

指導者に対する生徒の依存性を尋ねる各項目と、統合された依存性得点および依存欲求得点の平均値に関して、部内における生徒の競技水準による偏りの有意性を一元配置の分散分析により調べた。結果は、表1の通り、項目2 ($F(2, 910)=11.12, p<.001$)、項目4 ($F(2, 910)=18.34, p<.001$)、項目5 ($F(2, 910)=8.70, p<.001$)、項目6 ($F(2, 910)=25.50, p<.001$)、項目7 ($F(2, 910)=21.90, p<.001$)、項目8 ($F(2, 910)=9.46, p<.001$)、項目10 ($F(2, 910)=14.63, p<.001$)と統合された依存性得点 ($F(2, 910)=23.69, p<.001$)において有意であった。

多重比較(LSD法)の結果、各項目の平均値の比較において、統合された依存性に関わる全ての項目において

レギュラーが非レギュラーよりも得点が有意に高かった。そして、統合された依存性得点においても、レギュラーおよび準レギュラーが非レギュラーよりも得点が有意に高かった。

一方、依存欲求に関わる項目では、項目8のみ有意であり、レギュラーが準レギュラーおよび非レギュラーよりも得点が有意に低かった。依存欲求得点には、有意差は確認されなかった。

5) 部活動間の競技水準による比較

指導者に対する生徒の依存性を尋ねる各項目と、統合された依存性得点および依存欲求得点の平均値に関して、部活動間の競技水準による偏りの有意性を一元配置の分散分析により調べた。結果は、表1の通り、項目1 ($F(2, 919)=11.12, p<.01$)、項目2 ($F(2, 919)=11.12, p<.01$)、項目4 ($F(2, 919)=18.34, p<.001$)、項目5 ($F(2, 919)=8.70, p<.001$)、項目6 ($F(2, 919)=25.50, p<.001$)、項目7 ($F(2, 919)=21.90, p<.001$)、項目9 ($F(2, 919)=9.46, p<.05$)、項目10 ($F(2, 919)=14.63, p<.001$)と統合された依存性得点 ($F(2, 919)=23.69, p<.001$)において有意であった。

多重比較(LSD法)の結果、各項目の平均値の比較において、統合された依存性に関わる項目では全ての項目で全国大会水準の部活動が都県大会水準もしくは地区大会水準の部活動よりも得点が有意に高かった。そして、統合された依存性得点においても、全国大会水準の部活動が都県大会および地区大会水準の部活動よりも有意に高かった。

一方、依存欲求に関わる項目では、項目1で地区大会および都県大会水準の部活動が全国大会水準の部活動よりも有意に高かったが、項目9では前者よりも後者のほうが有意に高かった。依存欲求得点には、有意差は確認されなかった。

6) 競技種目による比較

指導者に対する生徒の依存性を尋ねる各項目と、統合された依存性得点および依存欲求得点の平均値に関して、競技種目による偏りの有意性をt検定により調べた。結果は、表1の通り、項目2 ($t(976)=4.31, p<.001$)、項目4 ($t(976)=4.16, p<.001$)、項目5 ($t(976)=3.77, p<.01$)、項目6 ($t(976)=3.28, p<.001$)、項目7 ($t(976)=4.54, p<.001$)、項目8 ($t(976)=3.70, p<.001$)、項目10 ($t(976)=3.68, p<.001$)と統合された依存性得点 ($t(976)=5.33, p<.001$)および依存欲求得点 ($t(976)=5.33, p<.001$)において有意であった。各項目の平均値の比較において、統合された依存性に関わる項目では全ての項目で個人競技のほうが集団競技よりも得点が有意に高かった。そして、統合された依存性得点においても個人

競技のほうが集団競技よりも有意に高かった。反対に、依存欲求に関わる項目では、項目8で集団競技のほうが個人競技よりも得点が有意に高かった。そして、依存欲求得点においても、集団競技のほうが個人競技よりも得点が有意に高かった。

2. 指導者像ごとの各要因による生徒の依存性の比較

指導者に対する生徒の依存性の下位尺度得点を生徒の認知する指導者像要因と各個人要因や状況要因(性別・学年・競技水準・競技種目)ごとに表2~表6にまとめた。

各個人要因や状況要因による生徒の依存性の比較を生徒の認知する指導者像ごとに行うために、生徒の認知する指導者像と各個人・状況要因(順に一つずつ)を独立変数とし、生徒の依存性を従属変数とする2要因分散分析(被験者間計画)を以下の通り行った。2要因の交互作用が有意であった場合には、3水準以上の要因に対してLSD法による多重比較を行った。

なお本分析では、生徒の認知する指導者像ごとに生徒の依存性を各個人・状況要因から比較することが目的である。つまり、各指導者像における個人・状況要因の単純主効果の分析が目的であるため、交互作用が有意でなかった場合には、そこで分析を終了した。すなわち、個人・状況要因の主効果の分析は、上記での各要因における有意差検定と重複するため行っていない。

1) 指導者像ごとの性別による比較

指導者像要因(4)と性別要因(2)を独立変数とし、生徒の統合された依存性と依存欲求を従属変数とする2要因分散分析を行った。結果は、表2の通り、統合された依存性において2要因の交互作用が有意であった($F(3, 969)=5.85, p<.001$)。そこで、単純主効果の分析を行った結果、統制型と両低型において性別要因による単純主効果が有意であり(統制型: $F(1, 969)=15.65, p<.001$ 、両低型: $F(1, 969)=6.95, p<.01$)、いずれも女子のほうが男子よりも得点が有意に高かった。

一方、依存欲求に関しては、2要因の交互作用が有意でなかった。

2) 指導者像ごとの学年による比較

指導者像要因(4)と学年要因(3)を独立変数とし、生徒の統合された依存性と依存欲求を従属変数とする2要因分散分析を行った。結果は、表3の通り、統合された依存性と依存欲求ともに2要因の交互作用が有意であった(統合された依存性: $F(6, 965)=3.05, p<.01$ 、依存欲求: $F(6, 965)=3.03, p<.01$)。そこで、単純主効果の分析を行った結果、まず統合された依存性に関して、統制型において学年要因による単純主効果が有意であった

表2 指導者像ごとの生徒の性別による生徒の依存性の比較

指導者像	統合された依存性				依存欲求			
	男子	女子	交互作用	単純主効果	男子	女子	交互作用	単純主効果
受容型 n=225	M (SD) 3.55 (0.57)	3.55 (0.56)		n.s.	2.96 (0.70)	2.99 (0.91)		—
統制型 n=257	M (SD) 2.84 (0.75)	3.45 (0.43)	5.85***	15.65*** (男子<女子)	3.32 (0.77)	3.57 (0.48)		—
両高型 n=307	M (SD) 3.81 (0.55)	3.82 (0.49)		n.s.	3.42 (0.67)	3.39 (0.63)	n.s.	—
両低型 n=159	M (SD) 2.61 (0.72)	3.11 (0.38)		6.95** (男子<女子)	2.83 (0.87)	2.50 (0.85)		—

注) * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

表3 指導者像ごとの生徒の学年による生徒の依存性の比較

指導者像	統合された依存性				交互作用	依存欲求			交互作用	単純主効果 (多重比較)
	1年生	2年生	3年生	1年生		2年生	3年生			
受容型 n=225	M (SD) 3.56 (0.55)	3.54 (0.58)	3.58 (0.61)	n.s.		3.03 (0.60)	2.97 (0.67)	2.81 (0.82)		n.s.
統制型 n=257	M (SD) 3.10 (0.68)	2.70 (0.77)	2.73 (0.73)	3.52**	12.42*** (1年>2,3年)	3.36 (0.66)	3.19 (0.83)	3.72 (0.70)	3.03**	7.41*** (1,2年<3年)
両高型 n=307	M (SD) 3.78 (0.51)	3.81 (0.50)	3.93 (0.71)		n.s.	3.36 (0.66)	3.44 (0.65)	3.50 (0.68)		n.s.
両低型 n=159	M (SD) 2.68 (0.63)	2.65 (0.80)	2.59 (0.69)		n.s.	2.77 (0.91)	2.75 (0.85)	3.10 (0.74)		n.s.

注) * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

表4 指導者像ごとの部内における生徒の競技水準による生徒の依存性の比較

指導者像	統合された依存性				交互作用	依存欲求			交互作用	単純主効果 (多重比較)
	レギュラー	準レギュラー	非レギュラー	レギュラー		準レギュラー	非レギュラー			
受容型 n=225	M (SD) 3.58 (0.60)	3.61 (0.60)	3.50 (0.48)	—		2.76 (0.69)	3.14 (0.61)	3.16 (0.58)		8.60*** (レギュ<準,非)
統制型 n=257	M (SD) 2.98 (0.80)	2.96 (0.64)	2.80 (0.74)	n.s.	—	3.40 (0.88)	3.44 (0.70)	3.26 (0.71)	3.86***	n.s.
両高型 n=307	M (SD) 3.92 (0.55)	3.79 (0.48)	3.60 (0.50)		—	3.44 (0.69)	3.49 (0.68)	3.34 (0.57)		n.s.
両低型 n=159	M (SD) 2.60 (0.75)	2.70 (0.90)	2.64 (0.64)		—	2.76 (0.99)	2.59 (0.87)	2.95 (0.78)		n.s.

注) * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

($F(2, 965)=12.42, p=.001$)。多重比較より、1年生のほうが2、3年生よりも得点が有意に高かった。

次に、依存欲求に関しては、統制型において学年要因による単純主効果が有意であった ($F(2, 965)=7.41, p<.001$)。多重比較より、3年生のほうが1、2年生よりも得点が有意に高かった。

3) 指導者像ごとの部内における生徒の競技水準による比較

指導者像要因(4)と生徒の部内の競技水準要因(3)を

独立変数とし、生徒の統合された依存性と依存欲求を従属変数とする2要因分散分析を行った。結果は、表4の通り、依存欲求において2要因の交互作用が有意であった ($F(6, 901)=3.86, p<.001$)。単純主効果の分析を行った結果、受容型において部内の競技水準要因による単純主効果が有意であった ($F(2, 901)=8.60, p=.001$)。多重比較より、準レギュラーや非レギュラーの生徒のほうがレギュラーよりも得点が有意に高かった。

一方、統合された依存性に関しては、2要因の交互作用が有意でなかった。

表5 指導者像ごとの部活動間の競技水準による生徒の依存性の比較

指導者像	統合された依存性				交互作用	単純主効果 (多重比較)	依存欲求			交互作用	単純主効果 (多重比較)
	地区大会	都県大会	全国大会	地区大会			都県大会	全国大会			
受容型 n=225	M (SD)	3.56 (0.53)	3.55 (0.57)	3.74 (0.61)	n.s.	—	3.12 (0.55)	2.95 (0.68)	2.91 (0.86)	n.s.	—
統制型 n=257	M (SD)	2.98 (0.83)	2.83 (0.71)	3.02 (0.74)		—	3.37 (0.85)	3.32 (0.74)	3.31 (0.67)		—
両高型 n=307	M (SD)	3.91 (0.55)	3.76 (0.53)	3.84 (0.54)		—	3.44 (0.65)	3.46 (0.62)	3.18 (0.76)		—
両低型 n=159	M (SD)	2.63 (0.76)	2.60 (0.68)	3.33 (0.53)		—	2.81 (0.95)	2.83 (0.83)	2.67 (0.96)		—

注) * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

表6 指導者像ごとの競技種目による生徒の依存性の比較

指導者像	統合された依存性		交互作用	単純主効果	依存欲求		交互作用	単純主効果
	集団競技	個人競技			集団競技	個人競技		
受容型 n=225	M (SD)	3.60 (0.53)	3.51 (0.60)	2.78*	n.s.	3.14 (0.61)	2.81 (0.69)	—
統制型 n=257	M (SD)	2.86 (0.73)	3.03 (0.81)		n.s.	3.33 (0.76)	3.37 (0.76)	—
両高型 n=307	M (SD)	3.76 (0.53)	3.89 (0.54)		n.s.	3.44 (0.63)	3.36 (0.70)	—
両低型 n=159	M (SD)	2.59 (0.74)	2.85 (0.58)		4.79* (集団<個人)	2.86 (0.88)	2.64 (0.82)	—

注) * $p<.05$ ** $p<.01$ *** $p<.001$

4) 指導者像ごとの部活動間の競技水準による比較

指導者像要因(4)と部活動間の競技水準要因(3)を独立変数とし、生徒の統合された依存性と依存欲求を従属変数とする2要因分散分析を行った。結果は、表5の通り、いずれも2要因の交互作用は有意でなかった。

5) 指導者像ごとの競技種目による比較

指導者像要因(4)と競技種目要因(2)を独立変数とし、生徒の統合された依存性と依存欲求を従属変数とする2要因分散分析を行った。結果は、表6の通り、統合された依存性において2要因の交互作用が有意であった($F(3, 970)=2.78, p<.05$)。単純主効果の分析を行った結果、両低型において競技種目要因による単純主効果が有意であり($F(1, 901)=4.79, p=.05$)、個人競技のほうが集団競技より得点が有意に高かった。

一方、依存欲求に関しては、2要因の交互作用が有意でなかった。

た依存性が高いことが示された。特に、生徒の認知する指導者像ごとの男女の比較によって、統制型と両低型において、女子のほうが男子より統合された依存性が高いことが示された。統制型と両低型はどちらも受容的な関わりが少ない指導者像である。したがって、指導者の受容的な関わりが少ない指導関係において、女子のほうが男子より統合された依存性が高いといえる。また依存欲求に関しては、性別による違いはみられなかった。

よって、統制型と両低型における女子生徒の依存性の特徴について検討すると、依存欲求に関しては男子のそれと相違はないが、統合された依存性に関しては女子のほうが男子より高かった。関(1982)によれば、統合された依存性が高く、依存欲求の低い依存性の在り方は、成熟した依存の形態であると述べられている。つまり、統制型と両低型において、女子生徒の依存性は、男子との比較において依存欲求は同程度であり、統合された依存性がより高かったことから、比較的成熟した依存の在り方であると考えられる。

IV. 考察

1. 性別による比較

結果より、全体として女子のほうが男子より統合され

2. 学年による比較

統合された依存性と依存欲求に関して、全体としては学年による有意差は確認されなかった。しかし、指導者像ごとに学年の比較を行ったところ、統制型において、

1年生が2,3年生より統合された依存性が高く、また3年生が1,2年生より依存欲求が高かった。統制型に関しては、松井(2012)が、Case(1984)を参考に部活動の初期段階の指導としては統制型が有効な面があるものの、長期的に統制の強い指導が続くことによって、生徒の依存的態度を促進し、生徒が自立的活動を抑制している可能性があることを指摘している。本結果より、統制型において1年生の統合された依存性が高く、3年生の依存欲求が高かったことは、先行研究での指摘を支持する結果であると考えられる。

また全体において、項目3「何かに迷っている時には、指導者に『これでいいですか』と聞きたい」、項目4「1人ではどうにもならない時は、指導者に相談することもある」では、1年生が2年生より得点が高かった。1年生は、高校入学後、部活動に入部して間もない時期であるため、慣れない環境の中で、指導者に対して具体的な助力を求めることが多くなると思われる。反対に、2年生では、部活動における規律や習慣が身につけており、指導者に対して具体的な助力を求めることが比較的少ないと考えられる。

3. 部内における生徒の競技水準による比較

統合された依存性は、全体としてレギュラーや準レギュラーのほうが、非レギュラーより高かった。つまり、レギュラーもしくは準レギュラーとして活動している生徒のほうが、非レギュラーの生徒より指導者に対するより成熟した依存性が高いといえる。

また依存欲求は、指導者像ごとの比較より、受容型において非レギュラーと準レギュラーのほうが、レギュラーより得点が高かった。同様に項目8「プレーしている時に、指導者の顔が気になることがある」においても、全体として非レギュラーもしくは準レギュラーの生徒のほうが、レギュラーの生徒より得点が高かったことから、より未熟な依存的傾向が示された。

したがって、受容型におけるレギュラーの生徒の依存性は、非レギュラーの生徒と比べて、統合された依存性が高く、依存欲求が低いことから、比較的成熟した依存性の在り方であるといえる。そして、準レギュラーの生徒の依存性は、統合された依存性も依存欲求も比較的高く、レギュラーの生徒と非レギュラーの生徒の中間的な特徴をもっていると考えられる。

4. 部活動間の競技水準による比較

統合された依存性は、全体として全国大会水準の部活動のほうが、地区大会および都県大会水準の部活動より高かった。よって、競技水準の高い部活動の生徒のほうが、競技水準の低い部活動の生徒より指導者に対するより成熟した依存性が高いといえる。また各項目の比較か

らは、全国大会水準の部活動の生徒では、項目4「1人ではどうにもならない時には、指導者に相談することがある」や項目5「部活動のことで何か決める時には、指導者の意見が聞きたい」が示すように指導者に助言を求める傾向や、項目7「指導者は自分を見守ってくれているように思うので、大事な場面も切り抜けられる」が示すように指導者を心の支えとして認識している傾向がみられた。さらに項目6「自分と指導者の立場を尊重しつつ、必要なときには、うまく頼ったり頼られたりするほうだ」からは、相互依存的な関係もうかがえ、地区大会および都県大会水準の部活動の生徒よりも自立的な依存関係であるといえる。

一方、依存欲求に関しては、部活動間の競技水準による違いは確認されなかった。各項目の比較からは、地区大会および都県大会水準の部活動の生徒では、項目1「何かする時には、指導者に気を配って励ましてもらいたい」が示すように、指導者の注目や配慮を求める傾向がみられた。そして、全国大会水準の部活動の生徒では、項目9「指導者が喜ぶように私は行動しているところがある」が示すように、指導者の意図や好みを察して行動する傾向があるといえる。

5. 競技種目による比較

統合された依存性に関しては、全体として個人競技のほうが集団競技より高いことが示された。特に、指導者像ごとの比較からは、両低型において個人競技のほうが集団競技より高いことが示された。両低型における指導者像は、生徒にとって指導者の受容的な関わりも統制的な関わりも少ない指導者像であり、生徒と指導者の関係が希薄であることが特徴であった。そのような指導者像の場合、個人競技のほうが集団競技よりも生徒と指導者との1対1の関係が築きやすく、生徒の統合された依存性も比較的高くなると考えられる。

依存欲求に関しては、全体として集団競技のほうが個人競技より高いことが示された。特に、項目8「プレーしている時に、指導者の顔が気になる」からは、指導者の反応や評価を気にする態度は個人競技の生徒よりも集団競技の生徒のほうが強いといえる。

以上より、両低型における集団競技の生徒の依存性の特徴は、個人競技の生徒と比べて、統合された依存性が低く、依存欲求が高いことから、比較的、未熟な依存の在り方であると考えられる。

V. まとめと課題

本研究では、指導者に対する生徒の依存性について、生徒の認知する指導者像ごとに生徒の各個人要因や状況要因(性別・学年・競技水準・競技種目)により比較を

行った。結果より、性別による比較では、女子のほうが男子より統合された依存性が高く、その傾向は統制型と両低型において確認された。学年による比較では、統制型において1年生の統合された依存性が2,3年生より高く、3年生の依存欲求が1,2年生より高かった。部内における生徒の競技水準による比較では、統合された依存性はレギュラーや準レギュラーのほうが、非レギュラーより高かった。依存欲求は受容型において非レギュラーや準レギュラーのほうが、レギュラーより高かった。部活動間における競技水準の比較では、統合された依存性は全国大会水準の部活動のほうが、地区大会や都県大会水準の部活動より高かった。依存欲求に関しては、部活動間における競技水準による違いは確認されなかった。競技種目による比較では、統合された依存性は個人競技のほうが集団競技より高く、依存欲求は集団競技のほうが個人競技より高いことが示された。

本研究では、指導者の関わりと生徒の依存性について、生徒の個人要因・状況要因から比較を行うことができた。今後の課題として、これらの諸要因に対するそれぞれの考察を統合することによって、より総合的で実践的な知見を現場に即した形で提供していくことが求められる。

注 記

注1) 松井 (2012) は、生徒の認知する指導者像を以下のように分類した。指導者の受容的な関わりが多く、統制的な関わりが少ない指導者像を受容型とし、反対に統制的な関わりが多く、受容的な関わりが少ない指導者像を統制型とした。そして、受容的な関わりと統制的な関わりがどちらも多い指導者像を両高型、どちらも少ない指導者を両低型とした。

注2) 統合された依存性とは、成熟し、安定し、統合された人格に備わっているべき依存性であり、また相互依存的な他者との良好な関係を保ち、かつ、そこから得た安定感を基礎として自立的になるために必要不可欠な依存性である(関, 1982)。この概念は、依存性についての高橋 (1969) の定義を参考にしている。高橋 (1969) は「依存性から自立への発達過程とは、依存性の発達の変容の過程にほかならないといえる。すなわち、発達に見合った仕方依存行動が現れるようになることが、自立的になっていくことにほかならない」と述べ、自立を依存性の一つの状態として、「依存要求の即時的な充足に対して、文脈に応じた統一的な自己の立場から決定を下すことを優先させることができる状態である」と定義している。(高橋, 1968, 1969)。

注3) 20種目の内訳は、サッカー、バスケットボール、バレーボール、ラグビー、バドミントン、テニス、

野球、ソフトボール、陸上競技、卓球、柔道、剣道、弓道、体操競技、相撲、水球、フィールドホッケー、自転車競技、空手道、少林寺拳法である。

注4) フェイスシートにて、学校生活の中で指導者と関わる場面とその割合(部活動や授業、担任など場面ごとにその比率)を尋ね、学校生活場面全般における指導者との関わりのうち、部活動場面における関わりが6割に満たない生徒は今回の対象からは除外された。例えば、“部活動：授業：担任＝5：3：2”の場合には、今回の研究対象には含まれない。

注5) サッカー、バスケットボール、バレーボール、ラグビー、野球、ソフトボール、水球、フィールドホッケーを集団競技とし、バドミントン、テニス、陸上競技、卓球、柔道、剣道、弓道、体操競技、相撲、自転車競技、空手道、少林寺拳法を個人競技として分析を行った。

注6) 高橋 (1968) は、依存性の様式について、次のように定めている。①ともにあることを求める。②注意を向けてもらふことを求める。③助力を求める。④保証を求める。⑤心の支えを求める。そして、この5つの中で、様式①、②、③は、④や⑤に比べ、身体的・受動的な幼い様式であると述べている。

謝 辞

本研究を行うにあたり、質問紙調査にご協力頂きました運動部の先生方ならびに生徒の皆様にご心よりお礼申し上げます。

文 献

- Baumrind, D. (1967) Child care practices anteceding three patterns of preschool behavior. *Genetic Psychology Monographs*, 76, 43-88.
- Bowlby, J. (1973) *Attachment and Loss, Vol.2 Separation: Anxiety and Anger*. Hogarth Press. 黒田実郎ほか訳 (1977/1991) 分離不安 岩崎学術出版社
- Case, R. W. (1984) Leadership in sport: The situational leadership theory. *Journal of Physical Education, Recreation, and Dance*, 55 (1), 15-16.
- Havighurst, R. J. (1953) *Human Development and Education*. Longmans, Green. 莊司雅子訳 (1958) 人間の発達課題と教育, 牧書店.
- 井上忠典 (1995) 大学生における親との依存：独立の葛藤と自我同一性の関連について. 筑波大学心理学研究, 17, 163 - 173.
- 松井幸太 (2012) 高校運動部活動における指導者の関わりと生徒の依存性. 応用教育心理学研究, 29, 25 - 35.

- 松井幸太 (2013) 運動部活動における指導者に対する生徒の認知の多様性－性別・学年・競技水準・競技種目からの検討－. 鳴門生徒指導研究, 23, 117－130.
- 文部省 (1997 a) 生涯にわたる心身の健康の保持増進のための今後の健康に関する教育及びスポーツの振興の在り方について. 保健体育審議会.
- 文部省 (1997 b) 運動部活動の在り方に関する調査研究報告. 中学生・高校生のスポーツ活動に関する調査研究協力者会議.
- 武藤芳照 (1985) スポーツ少年の危機, 朝日新聞社.
- 永島正紀 (1987) 発育期のスポーツによる心の障害(1)－精神科医の立場から－. 体育の科学, 37(2), 943－948.
- 永島正紀 (2002) スポーツ少年のメンタルサポート－精神科医のカウンセリングノートから－, 講談社.
- 関 知恵子 (1982) 人格適応面からみた依存性の研究. 臨床心理事例研究, 9, 230－249.
- Smoll,F.L.& Smith,R.E. (1989) Leadership behaviors in Sport:A theoretical model and research paradigm. *Journal of Applied Social Psychology*, 19, 1522-1551.
- 高橋恵子 (1968) 依存性の発達の研究: I 大学生女子の依存性. 教育心理学研究, 16, 7－16.
- 高橋恵子 (1969) 子どもの社会化過程と依存性. 岡本夏木編, 人格の発達, 金子書房, pp.91－136.
- 竹澤みどり・小玉正博 (2004) 青年期後期における依存性の適応的観点からの検討. 教育心理学研究, 52, 310－319.
- 山下一夫 (1996) 依存と自立の視点からみた不登校問題 鳴門教育大学研究紀要・教育科学編, 11, 227－239.